

contents

- 1 特集対談
経営体としてのUR都市機構の改革とこれから
幸田 真音 作家
寺澤 辰磨 独立行政法人都市再生機構 理事長代理

- 11 UR Project
みなとみらい21中央地区
土地区画整理事業

- 15 学術研究拠点・新産業の創出を目指して
北九州学術研究都市南部地区
「ひびきの」の事業完了と今後のまち熟成に向けて

- 17 都市の情景
「風のように 船のように」
みなとみらい21から望む 横浜ベイクォーター

- 19 連載 “いま光る” 都市を訪ねる 第5回
変わるものと変わらぬもの 豊後白杵の町並み
双方を見せてくれるまち
西村 幸夫 東京大学大学院 都市工学専攻教授

- 21 UR TOPICS / 編集後記

経営体としてのUR都市機構の改革とこれから

すすめている財務と事業の再構築

すすめた財務と事業のリストラ

寺澤 幸田さんはほんとうにお忙しいそうので、フランスの取材から帰られたばかりのようですが、時差はいかがですか。

幸田 小説はほとんど夜中に書いていますので、毎日が時差生活です(笑)。外国に行っているのもメールに追いかけるるので便利にはなりましたが大変です。

寺澤 ところで幸田さんのペンネームの姓は関西でいう「買った」、名前の真音は「mine」、トレード用語で「買った」の意味で、「買った」が二重になっているという人がいますね。

幸田 真音はそのとおりですが、姓の方はそうではなくて、デビューする時に、やはり名前が大切ですからたくさんの候補をあげて考えたのです。なかなか決まらず、「どうだ、という名前はないの」と聞かれて、だったら「こつだ」。ああだこつだの幸田なので(笑)。

寺澤 幸田さんはキャピタルマーケットで仕事をされ小説家になられたので、本日はマーケットの角度からUR都市機構を見ていただきたいと思いますが、ご批判をいただくのではないかと少し緊張しています。私も独立行政法人になって2年半、なんとか軌道にのってきたという状況です。昨年の決算は、販売用不動産の強制評価減を約1400億円計上しても781億円の利益を計上することができ、やっと経営改善の成果がでてきました。どうして経営改善が必要だったのかという理由ですが、独立行政法人発足時の平成16年7月時点で資産規模は18兆3千億円弱、主な内訳は賃貸住宅が8兆4千億円、ニュータウンが6兆



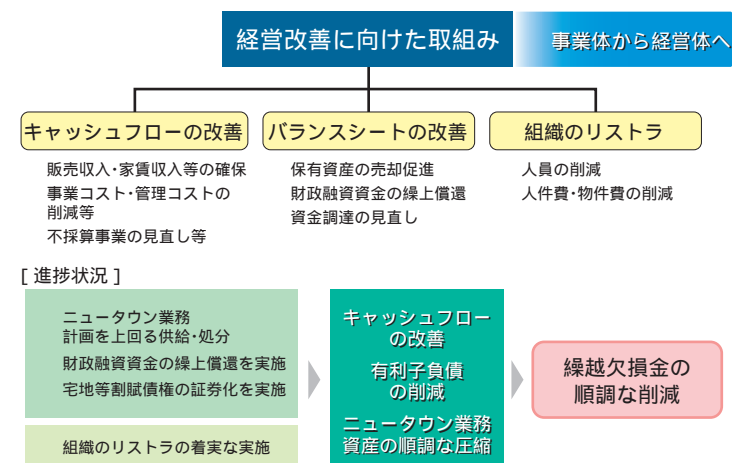
幸田 真音 作家
こうだ まいん

1951年生まれ。米国系銀行などを経て、95年作家に。タイムリーな経済トピックスをテーマに次々と作品を刊行し、多くの企業人・財界人からも圧倒的な支持を得ている。著書は『日本国債』『あきんど 綱屋半兵衛』『タックス・シエルター』など多数。テレビやラジオでも活躍。政府税制調査会、財政制度等審議会などの委員も務める。

特集 対談

寺澤 辰磨 独立行政法人都市再生機構 理事長代理
てらざわ たつまる
東京大学法学部卒業 大蔵省入省
財務省理財局長
国税庁長官等を歴任後 現職

経営改善に向けた取組み



円弱、再開発や区画整理などの既成市街地整備1兆7500億円強でした。それが時価評価した結果、賃貸住宅では2兆9千億円評価益で11兆3600億円強、ニュータウンは2兆9千億円の評価損で約半分になって3兆円強、既成市街地整備が6千億円評価損で1兆1200億円、合計で繰越欠損金が7300億円弱ということになりました。独立行政法人は5年間の中期計画を定めて事業をすることになっていますが、最初の中期計画では、5年間で222億の利益を見込んでいましたので、仮にこのペースでいけば繰越欠損を消すのに、約165年かかるといふ状況だったのです。そこでバブル経済崩壊後、民間企業が懸命な経営改善を行ったように、機構としては適切な経営改善策と自助努力により国民負担によ